ユンボギの日記

あの空にも悲しみが

〈愛蔵・児童版〉

イー・ユンボギ
塚本 勲 訳

日文 701678647

222929

ユンボギの日記

あの空にも悲しみが

〈愛蔵・児童版〉

イー・ユンボギ
塚本 勲 訳

北京外国语学院图书馆
藏书

816 イー ユン ボギ

李 潤福記
（塚本 勲 訳）

ユンボギの日記
——あの空にも悲しみが——

太平出版社 1965
234P 22cm

ユンボギの日記—あの空にも悲しみが—（愛蔵・児童版）

1965年6月30日 第1刷発行 ¥850
1973年10月5日 通算第50刷発行

著者 イー・ユンボギ（李潤福）
訳者 塚本 勲
発行者 東京都千代田区西神田 石合ビル内 崔容徳
印刷 江戸川印刷所
東銀座印刷KK
製函 大濤紙工社
製本 清正社

東京都千代田区西神田 石合ビル内
発行所 株式会社 太平出版社©
振替東京99563 TEL291-9744・9752

落丁本・乱丁本は、おとりかえいたします

ユンボギの日記

——あの空にも悲しみが——

ユンボギの日記　あの空にも悲しみが――を

お読みになるまえに

☆この日記は、南朝鮮＝韓国の李潤福（大邱明徳国民（小）学校四年、十才）少年が、一九六三(昭和三八)年六月から六四年一月までつづった日記を翻訳したものです（原書名は『あの空にも悲しみが』）。

☆ひと……ユンボギ少年のフルネームは李潤福（I Yun-bok）ですが、ふつうユンボギ（Yun-bogi）と、愛称でよばれているので、この日記では、いっかんしてユンボギとよぶことにしました。

ユンボギのきょうだいについて書くと、つぎのようになります。

ユンボギ（潤福）本人　10才　国民（小）学校四年
スンナ（明順）妹　8才　国民（小）学校二年
ユンシギ（潤植）弟　6才
テスニ（泰順）妹　5才

お母さんの家出、それにつづく妹スンナの家出については、日記のなかにその理由と経過がつづられていますが、お父さんの病気については、よくわかりません。肋膜炎、あるいは肋間神経痛とでも考えてよいかと思います。

☆とき……この日記がつづられた時期は朴正熙大統領が、軍事クーデターを終えて、軍政から「民政」に「移行」するために大統領選挙と国会議員の選挙をおこなった「転換」の時期にあたり、冷害と水害、農作物の凶作、とめどない物価の値上がりが、あいついだ時期にあたります。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

☆ところ……大邱は、朝鮮の東南方にあり、慶尚北道の道庁所在地（日本の県庁所在地にあたる）で、産業や文化の中心地であり、とくに古くから漢方薬の市がたつことでも有名です。市内には、洛東江の支流琴湖江が流れ、風光明眉な山紫水明の地です。ユンボギ少年は、その郊外にあるアメリカ空軍基地の近くから、市内の学校にかよっているわけです。

☆さいごに、この大邱は、東京から直線距離でわずか一千キロの地点にあり、東京から下関・博多までと同じ距離、大阪から札幌までと同じ距離にしかあたらない地点にあることを念頭において、お読みくださいますよう――

☆なお、そのごのユンボギ少年の消息については、本訳書の巻末（二三〇～二三二ページ）で、できるだけ新しいことがらまでお知らせしたいと思います。

太平出版社　編集部

★このジュニア版では、朝鮮の地名・人名にはカタカナでルビをふり、さし絵をくわえて、日本の少年少女に親しみやすくしました。

★注や解説は、巻末の二二五～六ページにまとめておきました。対照して読んでいただけば、本書の内容ばかりでなく、ユンボギの祖国＝日本のすぐ隣りの国＝朝鮮にたいして、いっそう親しみがふかまることとおもいます。

（一九六七年十二月　『ユンボギの日記』児童・生徒版発行にあたって　太平出版社編集部）

ユンボギの日記を読むまえに……2
Ⅰ お母さんは　いまどこに……7
ぼくはチューインガム売り……8
新しい部屋にひっこして……21
スンナの家出……31
ひもじさをこらえて……40
Ⅱ くらい真夏……47
お父さんの病気……48
ふたたび学校へ……58
薬きょうひろい……64
軍人兄さん　たよりもなく……75
あきカンをさげて……80

シンマイくつみがき……85
きょうは解放の日です……96
もののねだんは　ずんずん上がり……104
二学期……112
お父さんともわかれて……118
コレラ……124
ランプによせあう小さな顔……133
Ⅲ
明かるさをとりもどして……139
あたたかい金先生……140
ノランシャツ　ツイスト……147
ナマ傷……154
国会選挙……166
先生のペント……171

新聞にでて……174
だっそう……178
お母さんがなつかしい……186
Ⅳ　スンナ　もどっておいで……193
ハトになってお母さんとスンナをさがしたい……194
あの空にも悲しみが……204
新年のゆめ……214
金(キム)先生のけっこん式……220
注と解説……225
訳者あとがき……227
ユンボギのその後……230

編集製作＝崔　容徳　さし絵＝渡辺　学(新制作協会)
題字・シンボルマーク＝粟津　潔　装幀＝山本義信

I お母さんは　いまどこに

ぼくはチューインガム売り

6月2日（日）雨

おかあさん、きょうは一日じゅう雨がふっています。雨がふると、ますますおかあさんにあいたくなります。ぼくは、じっと、ねどこのなかで、どうしておかあさんはぼくたちをおいたまま家をでていったのだろう、と考えています。

おかあさんさえ、うちにいてくれたら、うちのものも、いまこんなに苦しまなくってもいいのに、と思います。

おかあさん、ぼくたち、家賃（やちん）がはらえなくて、南山洞（ナムサンドン）の家（1）をおいだされました。それで、おとうさんといっしょに、前の山（2）のふもとの、大明洞（テミョンドン）のヤギ小屋にひっこしてきました。

おかあさん、スンナはおかあさんの顔をおぼえていますが、ユンシギとテスニは、もうすっかりわすれてしまって、まいにち「おなかがすいた、すいた」といっては、たべものをほしがってばかりいます。

おかあさん、ぼくたち、いまたべるものがなくて、ごはんもたけません。スンナとぼくがチュー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

インガム売りをしてかせいだおかねで、ウドン玉[3]を買っては、たいてたべているようなありさまです。それで、ぼくたちには、生活の楽しみはぜんぜんありません。みんな、悲しい顔をして涙ばかりながしています。

おかあさん、ぼくは、おかあさんと手をつないで遊びにいきたいんです。おかあさんのたいたごはんをたべたいんです。でも、いまはおかあさんがいないから、こんなことを考えてもむだですね。

おかあさん、ぼくたち、どうしてはなればなれになって、おたがいのいどころもわからないでくらさなければならないのですか。おかあさん、いい生活ができる、できないは問題ではありません。おかあさんは、ぼくたちをかわいそうに思わないのですか。おかあさん、どこにいるのかしりませんが、はやくぼくたちのところへもどってきてください。

ぼくは、おかあさんがもどってくださりさえすれば、いっしょうけんめい勉強します。いうこともよくききます。弟や妹たちは、長いことおかあさんにあえないでいるので、おかあさんのことは話をしなくなりました。おかあさんが帰ってきてくれたら、家のものみんなが、どれくらい喜ぶでしょう。

おかあさん、おとうさんがにくくても、一日もはやく家に帰ってきて、いっしょにくらしましょ

う。おかあさん、おとうさんがいま、どれくらいおかあさんをまっているか、しらないのでしょう。

6月3日（月）雨

空はまた雨をふらそうとおもっているのでしょうか、東の方からすこしずつ暗くなってきます。きっと、今年の夏は、ずっと梅雨(4)がつづくのでしょう。きのうも、朝は晴れそうだったのに、夕がたから雨がふりだしました。ほんとうに、ぼくたちのように、その日その日をかせいでたべていくところは、ただのくろうではおっつきません。

昼ごはんの時間がすこしすぎたので、ぼくはガムを売りにでかけるのがいやだったけれども、また一食ぬくことを考えると、一銭でもかせがなければいけないと思い、ウドン玉でも買ってたいてたべようと、雨にぬれながら、まちのほうへでかけました。中央通りの「山びこ(5)」にはいると、お客はすこしだけで、店のなかはがらーんとしていました。

店のなかをぐるっとまわってでようとすると、窓ぎわにすわっていたお客さんが、コーヒーをのむのもわすれたように、心配そうな顔で新聞をみているので、ぼくは、そっとそばにいってのぞきこみました。そして、となりにいるもうひとりのお客さんと話しているのを、たちぎきしました。

その話によると、大雨がふって、家が水びたしになったり、土砂(どしゃ)くずれがおこって、たくさんの人がいきうめになり、なん人もの人が死んだということです。ぼくは、とつぜんバラック小屋でねているおとうさんや弟や妹たちのことが、目にうかびました。

きょうは、三十円(6)もかせいだら、はやく家に帰ろうときめていましたが、夜の十時をすぎて、やっと帰ることができました。雨がたくさんふって、道はどろどろでした。駅前から大邱(テグ)大学まではアスファルトなので、べつになんともありませんでしたが、大邱(テグ)大学前のバスの終点から家までは、どろんこ道で、帰ってみると、ひどいはねで、服がだいなしでした。

小屋の中にはいってみると、おとうさんと弟たちはねていましたが、スンナはどこへいったのか、みあたりません。きっと、おなかがすいたので、たべ物をさがしにいったのでしょう。

ぼくは、マッチをさがして、石油ランプに火をつけて、きょうかせいだおかねを数えてみました。十円さつが三枚、銅銭(トンジョン)が七(7)枚でした。帰りみちで菊花(クックファ)まんじゅうを三円ぶん買ってたべたので、みんなで四十円でした。でも、家をでるとき十円もっていたから、けっきょく、きょうは三十円かせいだことになります。

6月4日（火）曇り

南山洞（ナムサンドン）から、前の山の下のいまの家へひっこしてきてから、もうひと月たちました。おかねがないので、へや代がはらえなくって、おいだされてここへきたのですが、このバラック小屋は、もとはヤギ小屋だったので、へや代はいらないのです。それで、おかねの心配はありません。

ぼくは、ねそべったままで、じっと考えてみました。ぼくたちがこんなにくろうするのは、おかあさんがでていってしまったからだと思います。

ぼくは、南山洞（ナムサンドン）からおいだされたことを考えると、ただもう、おとうさんがにくくなります。また、おかあさんのことが、どれくらいうらめしいかわかりません。いま、ぼくたちの生活は、犬やねことまったくおんなじです。

でも、ぼくは、おかあさんが一日もはやく帰ってきてくれたらと、どれほど思いこがれているかわかりません。

6月5日（水）晴れ

勉強がおわりかけたときのことです。ぼくは、はやく家に帰りたいな、といらいらしていまし

た。すると、やっと先生が、

「では、きょうの勉強はこれでおわります。」

とおっしゃいました。

「起立！　気をつけ！　礼！」

級長の声がおわるなり、ぼくは、家にとんで帰りました。帰ってみると、おとうさんはるすで、スンナとユンシギとテスニがふざけっこをして、遊んでいました。

「スンナ、学校へいってきたの？」

「にいさんよりちょっとさきにもどったのよ。」

「はやくガム売りにいこう。」

「にいさんさきにいって。わたし、もうちょっとしてからいくから。」

「ばんめし、くえんぞ。はやくいこう。」とせかすと、

「うん。」と、スンナは立ちあがりながら、

「にいさん、きょうは、わたしの方がたくさんかせぐわよ。」

といいました。ぼくたちは、小屋をでて、二人でまちにいきました。

スンナがすこしまえを歩いて、ぼくはスンナのあとをついていきました。ぼくは、歩きながら考

えてみると、弟や妹たちがかわいそうになりました。

こんな生活をしていて、これからさき希望があるのだろうか。そう思ってみると、また、おかあさんの顔が目にちらつきました。どうしておかあさんは、ぼくたちをすてて家をでていってしまったのだろうか。もう永久に帰ってこられないような気がします。

夜十時ごろになって、「万味堂」(9)のまえでスンナにあいました。

「スンナ、もうやめて帰ろう。」

「にいさん、もう一時間だけ売ろうよ。」

「スンナ、いくつ残った?」

「これだけ。このふたつだけでもうおしまいよ。」

といいながら、ガムのつつみをぼくにみせました。ぼくはその声をきいたとき、おもわず涙がでそうでした。

6月6日(木)晴れ

目がさめてみると、そとはぱあっと明るくなっています。ごはんをめぐんでもらいにいかなければと思いながら、へやのすみにおいてあるあきカンをみました。どうして、あのあきカンをみるの

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com